

予測処理理論による〈痕跡〉概念の再解釈

—記号の確率論的理解に向けて

谷島 貫太（二松学舎大学）

発表要旨：

本発表は、記号と内的表象の関係を、予測処理理論（predictive processing）の観点からジャック・デリダの痕跡の概念を再解釈することで位置付け直すことを試みる。

ジャック・デリダは『声と現象』において、フッサールのうちに見出される〈声〉の透明な表現としての記号概念を批判している（デリダ 2005）。これは、意識に現れた現前（present）が、志向性を介して記号のうちに正確に表象＝再現前（re-present）されるというモデルに向けられた批判だとも言い換えられる。対してデリダは、表象＝再現前（representation）のうちに原理的に介入する不確実性を強調し、〈痕跡〉の概念を提示する。

ところで近年、認知科学の領域で、不確実性を内包した新たな表象概念が提起されている。予測処理理論（ホーヴィ 2021; Clark 2015）は、脳が確率論的な推論を行っているとする「ベイズ脳」（Doya 2007）のモデルに基づき、予測とそれに対するフィードバックとしての感覚入力を通して、予測に対する誤差を最小化していくプロセスとして確率論的に更新されていくものとしての内部表象概念を提示している。その内部表象概念は、世界の複雑性を、個体が生きていくために必要な手がかりの総体へと縮減することで得られる、環世界的な世界モデルとなる。

予測処理理論において表象は、個体が生きていくために、その範囲内で整合的なものとして構築したものであり、世界そのものを反映するものではない。そこでは、生きていくために必要な表象の精度を絶えず更新していくプロセスだけが存在している。世界は初めから予測に対する誤差としてのみ与えられ、その結果として、以後の予測のモデルとなる表象が更新される。つまり表象から表象への調整だけが存在し、世界のありのままの現前は一度も介在しない。

本発表では、世界の反映ではなく、予測に対する誤差をもとに絶えず更新されていくものとしての表象概念を、デリダの痕跡概念の確率論的な解釈として位置付けていく。記号は、その向こう側にいる意識の内部表象の透明な現われではなく、解釈者があらかじめその記号に投げかけた予測に対する誤差のフィードバックとしてのみ意味を持つ。そして読むという行為は、解釈者の内部表象の絶えざる調整でしかない。最終的にはエクリチュールを、それをもとに様々な主体が内部表象の調整を進めていった、その多様な調整プロセスの〈痕跡〉として捉え直す。

デリダ, J. 2005. 『声と現象』 林好雄訳, 筑摩書房.

Clark, Andy. 2015. *Surfing Uncertainty: Prediction, Action, and the Embodied Mind*. Oxford University Press.

Doya, Kenji. 2007. *Bayesian Brain: Probabilistic Approaches to Neural Coding*. MIT Press.

ホーヴィ, J. 2021. 『予測する心』 太田陽, 次田瞬, 林禅之, 三品由紀子, 佐藤亮司訳, 勁草書房.